

第3節 土器棺葬の変容

—— 摂河泉の弥生時代中期後葉～古墳時代前期の様相 ——

(財)元興寺文化財研究所 角南聡一郎

第1項 目的と方法

本稿では大阪府茨木市溝咋遺跡の土器棺資料の観察を契機に、大阪府下の弥生時代中期～後期にかけての土器棺葬の様相を問題とし、弥生時代中期～後期及び弥生時代後期～古墳時代前期の社会変化に伴い、それぞれの時期に土器棺葬はどのように変容していくのかを検討することを目的とする。

大阪湾沿岸を中心に弥生時代中期中葉に方形周溝墓が展開する。これらの方形周溝墓に伴う形で土器棺が大量にみられるようになる。この傾向は弥生時代中期後葉になっても継続する。しかし後期になると墓自体の様相が不明確となるが、これに従って土器棺の在り方も変容していることが予想される。これまでは具体的に大阪府下の土器棺葬について言及されることはほとんどなかった。そこで本稿では、まず基礎的作業として大阪府下の畿内第Ⅳ様式～古墳時代前期の土器棺を集成する。次にこれらの各属性について分析し、この分析から弥生時代中期後葉から古墳時代前期にかけて、どのような点で大きな変化が見いだせるのかを抽出し、この背景、つまり何がどのように変容したのかを想定することを目的とする。

土器棺の時期決定は基本的に棺に転用された土器によっておこなう。しかしこれらの土器は口縁部を打ち欠いている等、情報が欠落している場合が多く、厳密な時期決定は難しい。また土器編年上の問題もいくつかある。本稿と直接関連する問題は、畿内第Ⅲ様式と第Ⅳ様式との区分をどのように考えるかという点、弥生時代の終わり、古墳時代の開始をいつとするかという点があろう。

前者について、従来は弥生時代を前期・中期・後期に区分した際、凹線文の出現を画期として弥生時代中期の前半・後半に大別する場合や、畿内第Ⅱ様式・第Ⅲ様式・第Ⅳ様式をそれぞれ弥生時代中期の前葉・中葉・後葉に比定する場合があります、統一されていない。これは、第Ⅲ様式を凹線文の有無で古段階と新段階に区分した際、第Ⅲ様式新段階の資料と第Ⅳ様式の区別が、非常に困難であるということに起因している(佐原 1968、曾我 1972)。前述したように土器棺に転用された土器自体に情報が少ないという理由から、ここでは明瞭な凹線文の出現をもって第Ⅳ様式とする立場(寺澤・森井 1989)を支持したい。本稿では弥生時代中期を前葉・中葉・後葉に区分した場合、それぞれに第Ⅱ様式・第Ⅲ様式・第Ⅳ様式をあてることにしたい。

また後者についても、墓制の変化をもって古墳時代の開始を規定する説や、土器の変化をもって画期を設定する意見など様々である。しかし土器棺墓の場合は、その言葉通りに遺体は土器を転用した棺に納められているのであるから、土器の変化をもって時期区分を説明する方が理解しやすいと考える。そこで本稿では庄内式土器を弥生時代終末～古墳時代初頭に、布留式土器を古墳時代前期に比定する(角南 1997)。土器棺による時期区分が困難な庄内式期の資料は弥生時代終末～古墳時代初頭の資料として一括して考え弥生時代後期に含めて考えたい。以上のことから、本稿での時期を、弥生時代中期後葉・弥生時代後期・古墳時代前期という三つに区分してみていくことにしたい。また、小地域区分として大阪府下の旧国単位区分である摂津・河内・和泉という三つに分けて説明していきたい。

第2項 摂河泉の土器棺墓

1. 溝咋遺跡の土器棺墓

溝咋遺跡では弥生時代中期末～後期初頭と考えられる土器棺墓4基が検出された。いずれの立地も土器棺は単独で検出されており、棺身はどれも壺が転用されている。特に土器棺墓1の棺身として使用された壺は、その特徴から阿波地方、もしくはその周辺から搬入された土器である可能性が高い。この土器棺の法量は器高が61.1cmと最も高い数値を示している。棺身に搬入土器が使用されているという点と、弥生時代中期終末～後期初頭の過渡期の資料であり、土器様式の変化に伴い墓制はどのように変容していったかを考える資料として興味深い⁽¹⁾。

2. 各小地域の様相

では、大阪府下での土器棺墓はこの時期どのような様相を示しているのでしょうか。この疑問を解くために、府下の弥生時代中期後半から古墳時代前期にかけての土器棺資料の集成をおこなった(表30、31、32)。以下、前述したように、弥生時代中期後葉、弥生時代後期、古墳時代前期の順に、摂津、河内、和泉の各小地域における土器棺墓の分布の様相を中心にみていきたい。

全体の分布の状況からは、基数・遺跡数は時期が下るに従って減少していく傾向にあることが見て取れる。

【弥生時代中期後葉】 摂津では茨木市の東奈良遺跡、耳原遺跡、高槻市の芝生遺跡、安満遺跡、豊中市の勝部遺跡、能勢町の大里遺跡がある。河内は大阪市・東大阪市を中心として、土器棺が非常に多くみられる。大阪市城山遺跡では26基の、東大阪市瓜生堂遺跡では19基の土器棺が検出されている。和泉では、和泉市池上曾根遺跡で8基発見されているほか、和泉市池田寺遺跡、万町北遺跡、池田下遺跡で土器棺が検出されている。この時期は土器棺の基数・遺跡数では、河内が突出して多く、土器棺の基数が多いのは各時期を通じて河内が多い。

【弥生時代後期】 溝咋遺跡の所在する摂津では、この時期に茨木市東奈良遺跡、上穂積遺跡、將軍山遺跡、総持寺遺跡、高槻市嶋上郡衛跡遺跡、天神山遺跡と前時期の遺跡数とほぼ同数である。河内は遺跡数も土器棺の基数も大きく減少しており、前時期からすると変化が大きい。和泉では下田遺跡の1遺跡例のみであり、極端な減少傾向が看取できる。

【古墳時代前期】 この時期、摂津では土器棺墓は検出されていない。また、和泉でも鈴の宮遺跡の1例が検出されているのみである。しかし河内では八尾市で一定数の土器棺が存在していることが判明した。

第3項 資料の検討

次に、設定した各項目について検討をおこなっていき⁽²⁾たい。弥生時代中期後葉の資料数に対して、弥生時代後期、古墳時代前期の資料数は少なく、特に古墳時代前期では萱振遺跡一遺跡の資料がこの時期のデータの大半を占めるため、同一基準で扱うには問題が多々あると思われる。しかし、ここではそのような状況が、とりあえず摂河泉での実態であると理解し、あらかたの傾向をデータから読み取ることが試みてみよう。

【立地】(図293-1、表33) 全時期を通じては、A1類が最も多く、次いでE1類が多い。周溝墓の主体部に埋葬されたものと、土器棺墓が単独で立地する場合が多いようだ。弥生時代中期後葉は、A1類が53例あり、A2類も11例である。一方、E1類が25例ある。つまり方形周溝墓と関係する土器棺、特に主体部に埋葬された場合が多いことがわかるのと、これに対して土器棺墓単独で埋葬される場合も

表30 弥生時代中期後葉の土器棺一覧

No	所在地	遺 跡	遺 構	立 地	時 期	器 種 組 成	棺身穿孔	口 径	器 高	最大径	埋蔵状態	備 考	文 献	献
1	茨木市	東奈良	壺棺墓	E 1	IV	II 2		33.9	54.5	45.5	斜位		井上1988	
			壺棺墓	E 1	IV前	II 2		32.1	46.5	39	直位		井上1990	
2	茨木市	芦原	壺棺墓	E 1	IV後	I 6		26	59.5	40	斜位		川端1998	
3	高槻市	芝生	土器棺墓	E 1	IV	I 3							森田1988	
4	高槻市	安高	壺棺		IV	I 6		24	91	64		棺外に磨製石剣 1	原口1977	
5	豊中市	勝部	第12号墓	A 2	IV前	II 6	あり	20.7	32	25	斜位		藤井ほか1972	
			第13号墓	A 3	IV前	II 1	あり	24	42	35	直位			
			第14号墓	A 3	IV前	I 1	あり	21	37	29.5	斜位			
6	能勢町	大里	壺棺	E 1	IV	I 7							尾上・岡本1986	
			土器棺	E 1	IV	I 4		21.2	41.4	25.8	斜位			
7	枚方市	星ヶ丘西	土器棺墓	A 3	IV							7 基検出	西田1980	
8	枚方市	田口山	壺棺墓	E 2	IV	II 6		30	45	36	斜位		西村1995	
				E 2	IV	I 7								
				E 2	IV	II 7								
9	東大阪市	瓜生堂	5号第1主体部	A 1	IV	I 6		30.8	39.4	35	斜位		岩崎ほか1990	
			13号第3主体部	A 1	IV前	I 4		26	23.6	28	斜位			
			23号壺棺墓	A 3	IV前	II 1		23.1	55.3	37.2	斜位			
			24号主体部	A 1	IV前	II 4		17.4	45.4	40.2			松宮1997	
			1号壺棺	A 1	IV前	I 4	あり	32.2	42.2	30.5	直位			
			2号壺棺	A 1	IV前	II 4	あり	27.8	37.8	36.5	直位			
			壺棺	A 1	IV前	I 4		17	39.1	38.2	直位			
			2号周1号壺棺	A 1	IV前	II 4		36	61	41.2	横位	他地域産土器	今村ほか1981	
			2号周2号壺棺	A 1	IV前	II 4		8.8	46.8	32.4	斜位			
			2号周3号壺棺	A 1	IV前	II 4		32.6	58.2	39.6	斜位	他地域産土器		
			2号周4号壺棺	A 1	IV前	II 6					斜位			
			2号周5号壺棺	A 2	IV前	II 6					斜位			
			2号周1号壺棺	A 1	IV前	I 3		9	21.2	25.2	直位			
			8号周1号壺棺	A 2	IV	I 6		12.4	29	21.4	横位			
			14号周1号壺棺	A 1	IV前	I 6		20.4	52.5	46.4	斜位			
			5D19壺棺	E 1	IV	II 3		19.2	31.4	23.4	直位		田代ほか1973	
			5D19壺棺	E 1	IV	I 4					斜位			
			6A19壺棺	E 1	IV	II 1					斜位			
			壺棺	A 1	IV	II 4		32.8	50.2	37	横位		物田1984	
10	東大阪市	巨摩	11号第1主体部	A 1	IV	I 1		1.8	51.2	40	斜位		三好ほか1995	
			11号第9主体部	A 1	IV	II 4		35.4	45.2	38.8	斜位	永久歯		
11	東大阪市	西之辻	壺棺墓	E 1	IV	II 8 蓋壺 + 壺		20	48	37.2	横位	人骨（胎児か乳児）	平本編1992	
			壺棺墓	E 1	IV	I 1		19.8	35.4	30	直位	人骨（胎児）		
			土器棺	E 1	IV	II 4		40	54	48	横位	人骨（幼児）	曾我ほか1994	
12	東大阪市	鬼虎川	第1土器棺	E 1	IV	II 1		39.5	50	42.5	斜位		曾我ほか1994	
			第2土器棺	E 1	IV	II 1		45	44.8	38	横位		曾我ほか1994	
			壺棺墓	E 1	IV	I 1	あり	18.2	40	31.4	直位	人骨（乳児）	平本・松田編1984	
13	東大阪市	久宝寺	土器棺	A 1	IV	I 6		15.4	44.5	37.8	斜位		中西1986	
14	大阪市	城山	1号土器棺	A 1	IV	II 4		32.4	54	40.2	斜位		杉本・岩瀬1986	
			2号土器棺	A 1	IV	II 4		28.4	42	30.2	斜位			
			3号土器棺	A 1	IV	I 6		25.6	58.4	40	斜位			
			4号土器棺	A 1	IV	II 4		29.4	46.6	33.6	斜位			
			5号土器棺	A 1	IV	II 4		32	45.2	37.4	斜位			
			6号土器棺	A 1	IV	II 2					斜位			
			7号土器棺	A 1	IV	II 8 水差し形土器		10.8	21	20.4	斜位			
			8号土器棺	A 1	IV	II 6		21		22.8	横位			
			9号土器棺	A 1	IV	II 4		40.3	47.6	44.4	斜位			
			10号土器棺	A 1	IV	II 4		30.3	48.6	36.8	斜位			
			11号土器棺	A 1	IV	I 6		25	42	42.7	斜位			
			12号土器棺	A 1	IV	II 4		29.4	49.6	36.6	斜位			
			13号土器棺	A 1	IV	II 1		21.4	29	25.4	斜位			
			14号土器棺	A 1	IV	II 2		32	35		斜位			
			15号土器棺	A 1	IV	II 1		30.8	46	32.4	斜位			
			16号土器棺	A 1	IV	鉢 + 鉢	あり				斜位			
			17号土器棺	A 1	IV	II 4		14.5	45	38.8	斜位			
			18号土器棺	A 1	IV	II 4 鉢 2		32.2	42.4	37	斜位			
			19号土器棺	A 1	IV	II 4		38	46.4	42.5	斜位			
			20号土器棺	A 1	IV	II 7		30.5	54	42.6	斜位			
			21号土器棺	A 1	IV	I 4		31.9	34.6	40	直位			
			22号土器棺	A 1	IV	II 6		38	60.6	44	斜位			
			23号土器棺	A 1	IV	II 4		40.4	52.8	43	斜位			
			24号土器棺	A 1	IV	II 4		29.2		30.4	斜位			
			25号土器棺	A 1	IV	II 4		27.2	45	30.6	斜位			
			26号土器棺	A 1	IV	II 1		41.2	59.2	50	斜位			
15	八尾市	成法寺	1号土器棺	A 1	IV	I 3		256	57	27.8	斜位		山上1989	
			2号土器棺	A 1	IV	II 4		40.2	50.2	42.4	斜位			
16	八尾市	亀井	130-00	E 1	IV	II 8 蓋壺 + 高杯		31.4	38	30	斜位	人骨（小児）	森井1989	
			STD101	A 1	IV前	II 4		38.4	56	42.2	斜位		広瀬ほか1986	
			STD101 1号	A 1	IV前	II 4		29	36.8	32	斜位			
			STD101 2号	A 1	IV前	II		34.8		43.8	斜位			
			SX3002	E 1	IV	II 2		33.4	49.2	40	直位	人骨（乳児）	高島ほか1980	
			土器棺	A 1	IV前	I 1 底に壺底部		20.8	30	30.8	直位		近江編1989	
			1号土器棺	A 1	IV前	I 8 蓋鉢 + 壺		18.2	41	40	横位		杉本・岩瀬1986	
			2号土器棺	A 1	IV前	I 6		11.2	45.3	38.4	斜位			
			3号土器棺	A 1	IV前	II 4		40	54	46.8	斜位			
			4号土器棺	A 1	IV前	I 2		15	40	36.2	斜位			
			5号土器棺	A 1	IV前	II 4		27.6	40.8	35.4	斜位	鉄刀 1		
17	八尾市	久宝寺	土器棺 1	E 1	IV	I 4	あり	22.2	40.2	40	斜位		高萩1991	
18	八尾市	神宮寺	土器棺墓 1	E 1	IV後	II 4	あり	30.6	39.6	39.6	斜位		岡田1997	
			土器棺墓 2	E 1	IV後	II 4		27.3	49.3	39.2	直位			
			壺棺	E 1	IV	I 3		19	29.6	25.4	直位		米田1987	
19	八尾市	中田	土器棺墓 1	A 2	IV	II 2		15.2	36	30	直位	人骨（幼児）	坪田1992	
20	八尾市	竹瀬	壺棺	E 1	IV	II 1					斜位		米田1985	
21	八尾市	恩智	壺棺墓 1	E 1	IV	I 6		15	27.2	22.1	斜位		泉本1980	
22	羽曳野市	高屋城址	SK01	F	IV	II 4		37.4	60	43.8	横位		高野ほか1988	
23	羽曳野市	真志	土器棺墓	E 1	IV前	II 1					斜位		小林1983	
24	富田林市	甲田南	土器棺墓 1	E 1	IV	II 2	あり	33	38.2	37.2	斜位		小林1985	
			土器棺墓 2	E 1	IV前	II 1		37.5	56.5	44	斜位		中辻編1986	
25	富田林市	真志西	壺棺墓	E 1	IV前	II 1		14	38.8	38.8	直位		桑野1986	
26	柏原市	安堂	土坑 9	B	IV	I 6		11.4	32.3	39.7	斜位		西川1987	
27	和泉市	池上曾根	土器棺墓 1 - 1	A 2	IV	II 1			35	43	斜位			
			土器棺墓 1 - 2	A 2	IV	I 4		25.5	42	39.5	直位			
			SK01	E 2	IV	I 6							井藤ほか1979	
			第1号棺		IV前	II 1	あり							
			第5号棺		IV前	I 1	あり							
			第7号棺		IV前	I 7		32.4	47.2	38.2				
			第8号棺		IV	II 7								
28	和泉市	池田寺	313-00	B	IV	II 2		21.4	29.6	26			田中ほか1991	
29	和泉市	万町北	U001	A 2	IV前	I 4	あり	12	30.5	28.8	斜位		森1993	
			U002	A 2	IV前	I 7					直位			
30	和泉市	池田下	土器棺墓 1	A 2	IV前	II 4				34.4	斜位		白石編1991	
			土器棺墓 2	A 2	IV前	I 6		33.4	47.7	37.5	斜位			
			土器棺墓 3	A 2	IV前	II 2		31.1	45.2	36.9	横位	サスカイト剥片 1		

表31 弥生時代後期の土器棺一覧

No	所在地	遺 跡	遺 構	立 地	時 期	器 種 組 成	棺身穿孔	口 径	器 高	最大径	埋蔵状態	備 考	文 献
1	茨木市	溝咋	土器棺墓 1	E 1	V前	I 2		23.2	61.1	43.2	横位	他地域産土器	本報告
			土器棺墓 2	E 1	V前	I 4			30.3	28.8	斜位		
			土器棺墓 3	E 1	V前	I 3		16	48.2	46	斜位		
			土器棺墓 4	E 1	V前	I 3		17.6	36.2	37.2	斜位		
2	茨木市	東奈良	SV-01	E 1	V末	I 1		28	60	48	斜位		濱野・中東1991

No	所在地	遺 跡	遺 構	立 地	時 期	器 種 組 成	棺身穿孔	口 径	器 高	最大径	埋蔵状態	備 考	文 献
3	茨木市	上郷墳		E 1	V 末	I 1		19	64	50	斜位		田代1959
4	茨木市	将寶山			V 末								田代1959
5	茨木市	総持寺	土器棺墓 1	A 3	V 後	I 4		21	43.2	48.2	直位		山上編1997
			土器棺墓 2	A 3	V 後	I 3	あり	23.2	97.3	43.8	横位		
6	高槻市	嶋上郡衛跡	壺棺墓	E 1	V						斜位		大船1981
			壺棺墓	E 1	V 後	I 4			40	35			
			土器棺 1	B	V 後～末	I 7			36	42.6	斜位		橋本・川村1998
			土器棺 2	B	V 後～末	I 7			42.1	50	斜位		
7	高槻市	天神山			V 末								田代1959
8	枚方市	招提中町	ST01	A 1	V 後	I 5		18.4	34.2	25.2	横位		森井1997
9	西条畷市	雁屋	壺棺墓	E 1	V 後	I 4		14	40	41.4	斜位		辻本1987
10	東大阪市	巨摩	3号第6主体部	A 1	V 前	II 3		24.8	42.6	32.4	斜位		三好ほか1995
			3号第7主体部	A 1	V 前	I 2		14.2	31.6	43.8	斜位		
11	大阪市	長原	SX701	E 1	V 初	I 1 蓋壺 + 高杯		26	41.4	44.4	斜位		大阪市1985
12	八尾市	龜井	SX3002	E 1	V 前	I 6		9.8	34.2	34.5	横位	人骨（乳幼児）	高島ほか1983
13	八尾市	龜井北	SP1005		V	II 6		14	23.6	19.4	横位		小野ほか1985
					V 末	I 7					斜位		大塚ほか1985
14	八尾市	美園	BSX302		V 末	I 7	あり		31	34.4	直位		岡本ほか1985
15	藤井寺市	土師の里	土坑243	F	V 中	I 6	あり	8.4	12.2		横位		岩崎・岩瀬1981
17	羽曳野市	駒ヶ谷	SX029	A 1	V 中	I 4	あり	20.2	40.4	44.4	斜位		高野・小嶋1992
				A 2	V 中	I 7	あり				直位		
18	柏原市	本郷	土器棺	A 1	V	I 1		17	55.3	50.2	斜位		北野1993
19	河南町	東山	土器棺墓 2	E 1	V	I 1		16.2	29	30	直位		赤井1998
			土器棺墓 2	E 1	V	I 6		12	37	37	直位		
20	堺市	下田	SM-1	E 2	V 後	I 7		16.2	24.2	27.2	斜位		浅岡編1995
			SM-2	E 2	V 後	I 7				28	斜位		

表32 古墳時代前期の土器棺一覧

No	所在地	遺 跡	遺 構	立 地	時 期	器 種 組 成	棺身穿孔	口 径	器 高	最大径	埋蔵状態	備 考	文 献
1	八尾市	龜井北	壺棺	D 1	古墳前	I 1		29.5	81	59	横位		奥・山上1984
2	八尾市	久宝寺	土器棺	D 1	古墳前	I 1		20	50	55.5	斜位		西村1989
3	八尾市	小阪合	土器棺墓301	E 1	古墳前	I 6		28.2		47.2	横位		高萩1994
			土器棺 2	E 2	古墳前	I 1			24.4	30.4	横位		
5	八尾市	美園	ASX301	E 2	古墳前	II 4		30.5	40.5	40.7	斜位		岡本ほか1985
6	八尾市	萱振	SX01	E 2	古墳前	I 1		10.2	30.5	29	横位		大野編1983
			SX02	E 2	古墳前	II 2		12.4	23.4	22.2	横位		
			SX03	E 2	古墳前	II 6					横位		
			SX04	E 2	古墳前	I 6					横位		
			SX05	E 2	古墳前	II 6		14.4		21.4	横位		
			SX06	E 2	古墳前	I 6		11.8	28	25.6	横位		
			SX07	E 2	古墳前	I 6		16.2		26.6	横位		
			SX08	E 2	古墳前	I 6		19.8	32.4	26.4	横位		
			SX09	E 2	古墳前	II 6		15.2		20	横位		
			SX10	E 2	古墳前	II 6							
			SX401	E 1	古墳前	I 6		12.2	32.1	26.5	横位		阪田1984
			SX402	E 1	古墳前	II 6					横位		
7	羽曳野市	東阪田	SX02	E 2	古墳前	II 4					斜位		尾上1981
			SX03	E 2	古墳前	I 6			15.2	32.3	横位		
			SX04	E 2	古墳前						直位		
8	堺市	鈴の宮	SX055	D 3	古墳前	I 1		21	57.7	57.5	直位		北野編1986

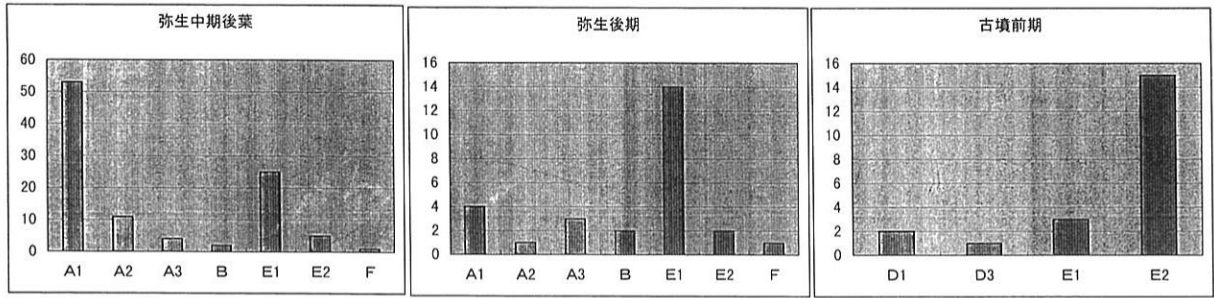
多かったことが読みとれる。弥生時代後期では、A 1 類が4例と大きく減少するのに対して、E 1 類は14例とこの時期では最も多いことがわかる。古墳時代前期になると、古墳と関係して埋葬される土器棺が僅かに存在する（D類）が、最も多いのはE 2 類であり、八尾市萱振遺跡のように、一遺跡で多数の土器棺のみから成る墓域を構成する場合が特徴的に存在する。

【器種組成】（図293-2、図294、表34） 弥生時代中期後葉では、II 4 類が29例で、I 6 類が13例、次いでII 1 類が12例と多い。弥生時代後期は、I 7 類が6例で、次いでI 1 類が5例である。古墳時代前期は、I 6 類が6例、I 1 類が5例、II 6 類が4例という順である。弥生時代中期後葉には甕を棺身・鉢を棺蓋に転用するものが突出して採用されている。次いで壺を棺身として単棺であるものや、甕を棺身・壺を棺蓋にするものが多い。弥生時代後期では、壺を棺身としたものか主体となり、甕を棺身とするものは一気に減少している。ところが古墳時代前期では甕のみ単棺で使用する場合もあり、やや壺を棺身とするものがやや優勢といった程度であろう。

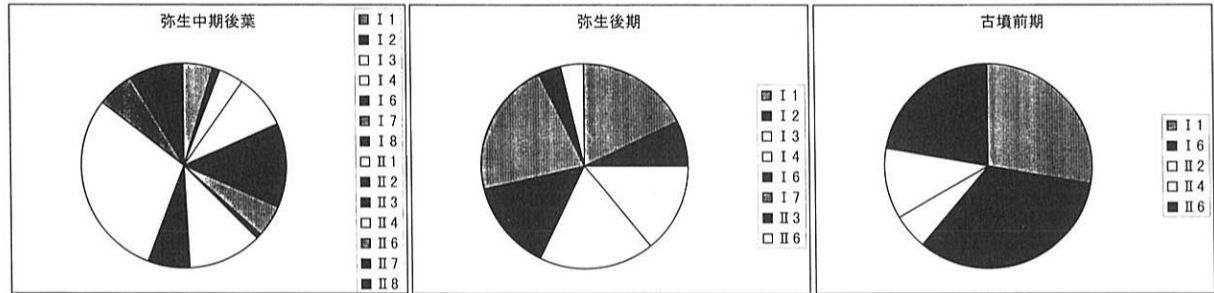
全時期では、II 4 類が31例と最も多く、次いでI 6 類が23例と多い。つまり、府下の土器棺に転用される土器の組み合わせとしては、甕を棺身・鉢を棺蓋に転用するもの、壺を棺身とした単棺であるものの二つの類型が特徴的に盛行すると理解できる。

【棺身穿孔】 棺身に焼成後の穿孔をするものは、全時期を通じては18例、弥生時代中期後葉は13例、弥生時代後期に5例あるが、古墳時代前期には1例も見られなくなる。全体の比率としては各時期を通じて、穿孔がなされるものはあまり多いとはいえない。

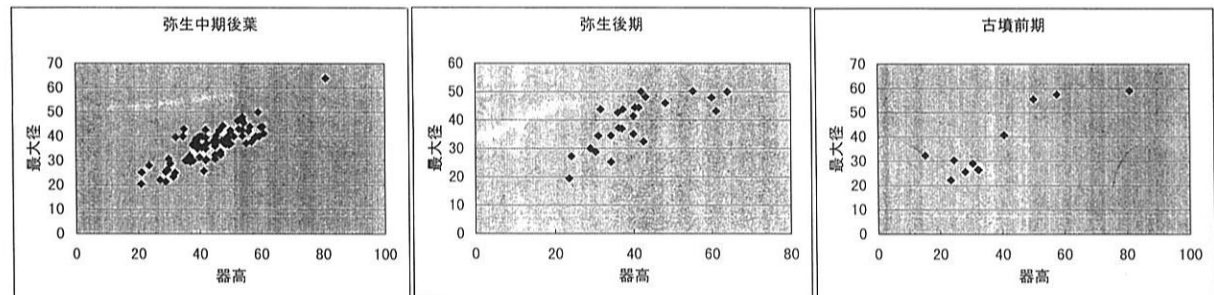
【棺の法量】（図293-3） 棺の法量のうち特に、被葬者の身体の高さが想定できる器高と最大径の関係に注目してみたい。弥生時代中期後葉では器高は20～60cmの、最大径は20～50cmの範囲に収まる。ただし、高槻市安満遺跡例の器高は81cm、最大径は64cmと飛び抜けて大きい。弥生時代後期になると、器高は20～60cmの、最大径は20～50cmの範囲に分布する。古墳時代前期は、器高は20～40cmの範囲に多



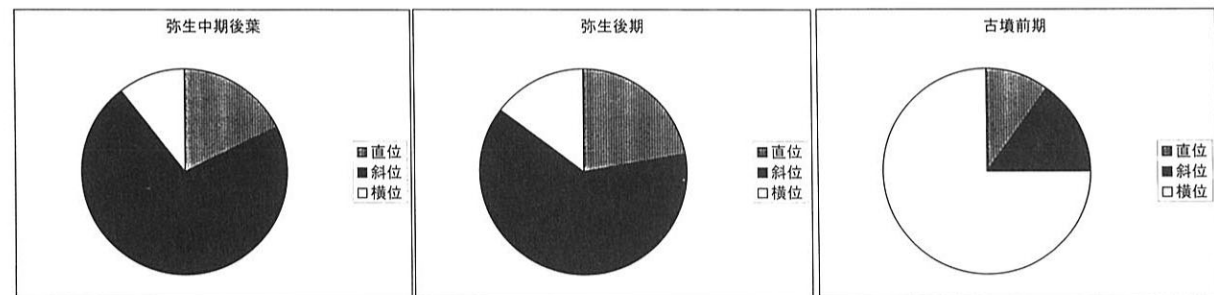
1. 各時期の立地頻度



2. 各時代の器種組成頻度



3. 各時代の器高・最大径の比率



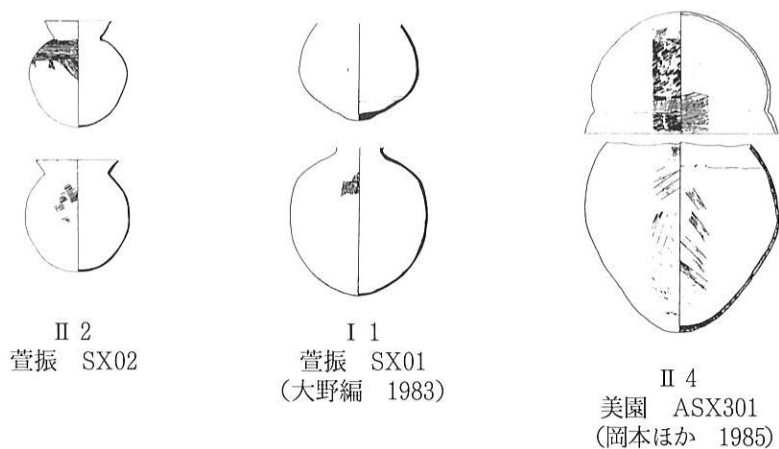
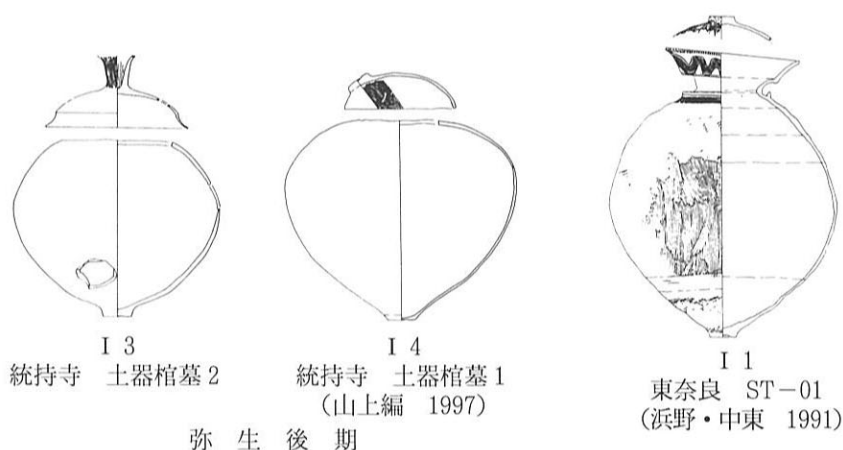
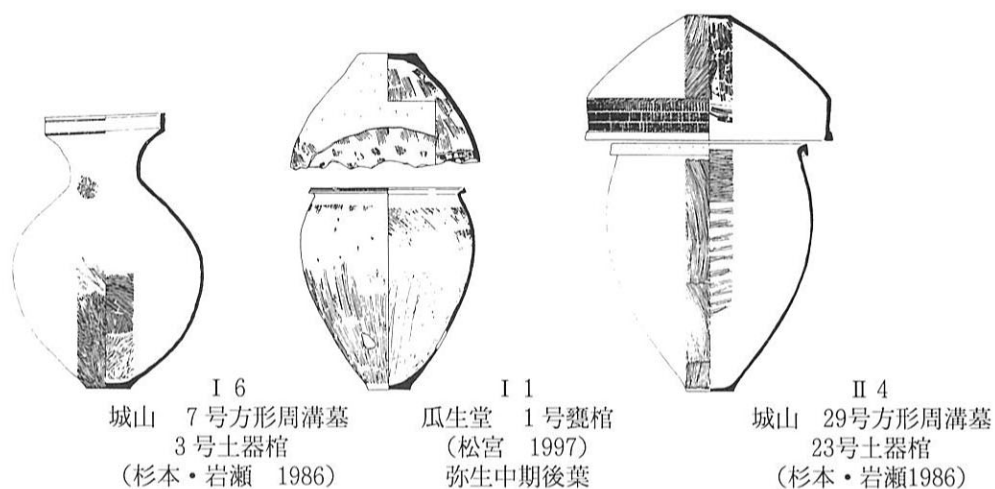
4. 各時期の埋葬状態頻度

図303 土器棺資料の検討

いが、80cmを超える八尾市亀井北遺跡例や、20cmに満たない羽曳野市東阪田遺跡例のようなものも存在するようになる。最大径は20～60cmの範囲に収まるが、集中する範囲は20～30cmである。

棺の法量については、弥生時代中期後葉段階は大きなものから小さいものまでが均等に存在しており、弥生時代後期段階になってもこの傾向は変わらない。この段階では立地によって棺のサイズに違いはみられない。しかし、古墳時代前期段階には、大きな棺と小さな棺の二つのグループに区分できそうである。立地でD 1類のものは大きいサイズの棺が採用され、E類のものは小さいサイズの棺が採用されており、立地によって明確に棺のサイズに違いがあることが判明した。

【埋葬状態】(図293-4、表35) 全時期を通じては、斜位が88例と多く、横位が29例、直位が25例と



古墳前期

図304 各時期の土器棺

表33 各時期の立地

	A1	A2	A3	B	D1	D3	E1	E2	F	合計
弥生中期後葉	53	11	4	2			25	5	1	101
弥生後期	4	1	3	2			14	2	1	27
古墳前期					2	1	3	15		21
合計	57	12	7	4	2	1	42	22	2	149

表34 各時期の器種組成

	I1	I2	I3	I4	I6	I7	I8	II1	II2	II3	II4	II6	II7	II8	合計
弥生中期後葉	5	1	4	9	14	5	1	12	6	1	31	6	6	3	104
弥生後期	5	2	4	5	4	6				1		1			28
古墳前期	5				6				1		2	4			18
合計	15	3	8	14	24	11	1	12	7	2	33	11	6	3	150

表35 各時期の埋葬状態

	直位	斜位	横位	合計
弥生中期後葉	17	68	10	95
弥生後期	6	17	4	27
古墳前期	2	3	15	20
合計	25	88	29	142

尾市亀井遺跡1号方形周溝墓1号5号土器棺からは鉄刀の破片が1点出土している。また、和泉市池田下遺跡土器棺墓3内からはサヌカイト剥片が1点出土している。

副葬品を伴う例については、他地域では一定量の副葬品がみられることと比較すると（角南 1999c）、河内での土器棺の数からすれば少ないといわざるをえない。

【埋葬遺体】 棺内に埋葬遺体が遺存した例は、計9例ある（角南 1999b）。このうち弥生時代中期後葉段階が8例、弥生時代後期段階が1例である。東大阪市巨摩遺跡11号方形周溝墓第9主体部からは、永久歯が1点出土している。同じく東大阪市の西之辻遺跡では遺体が依存した土器棺が3例あり、それぞれ10ヶ月前後の胎児か乳児、7ヶ月前後の胎児、幼児とされる。東大阪市鬼虎川遺跡の壺棺墓からは1歳くらいの乳児が発見された。八尾市亀井遺跡では、2例の埋葬遺体の検出が報告されており、130-OU⁽³⁾のものは小児、SX3002のものは乳児とされる。また弥生時代後期のSX3002からも乳幼児骨が発見された。八尾市竹淵遺跡土器棺墓1は5～6歳までの幼児の乳歯が1点出土している。

第4項 土器棺墓はいかに変容したか

府下土器棺葬の特徴を要約し整理しておこう。弥生時代中期後葉では、土器棺資料の多くは、大阪市城山遺跡、東大阪市瓜生堂遺跡から集中して検出されている。これらの立地は方形周溝墓の方台部に埋設されている。いずれも一基の周溝墓に対して複数の土器棺が埋設される点が特徴的である。これらのような、方形周溝墓と関係して埋設される土器棺だけでなく、土器棺墓のみ単独で立地する一群も各時期に存在している。棺の特徴としては、甕を棺身・鉢を棺蓋にするものが弥生時代中期後葉を中心に多い。次いで壺のみ単棺であるものも多い。また、棺身への焼成後穿孔はあまり顕著ではない。棺の法量は弥生時代中期後葉段階では大きなものから小さなものまで様々なものが、各法量にまんべんなく分布している。しかし、古墳時代前期になると大きいものと小さいものの二つに分化するようで、大きい棺は古墳の主体部に採用され、小さいものは土器棺墓のみ立地する際で使用される（図295）。

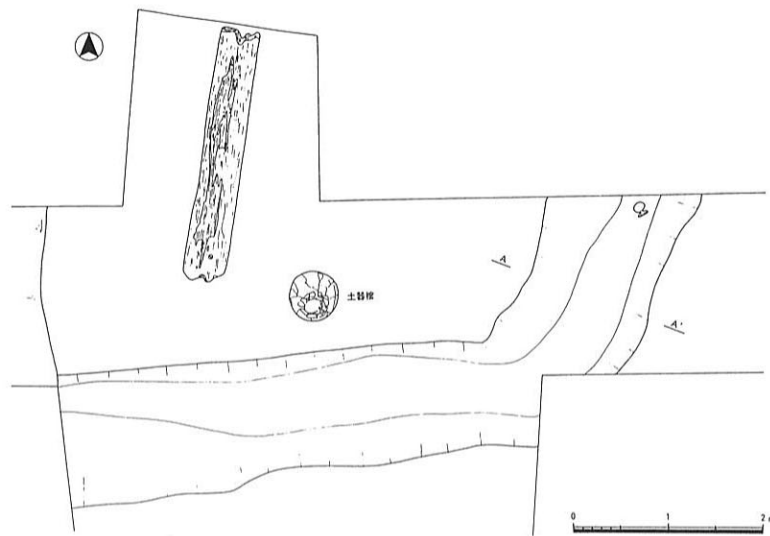
それでは、土器棺葬はどのように変化したのかを考えてみよう。これまでは、畿内の墓制研究において、土器棺墓は研究者によってどのようにとらえられてきたのだろうか。

方形周溝墓は弥生時代中期の段階では、家族墓としての性格が強いとされる（都出 1970）。この前提より、方形周溝墓の方台部に埋設された土器棺は、「家族」という単位で考察されてきた。こうした観点から、畿内の土器棺について僅かではあるが解釈がなされている。

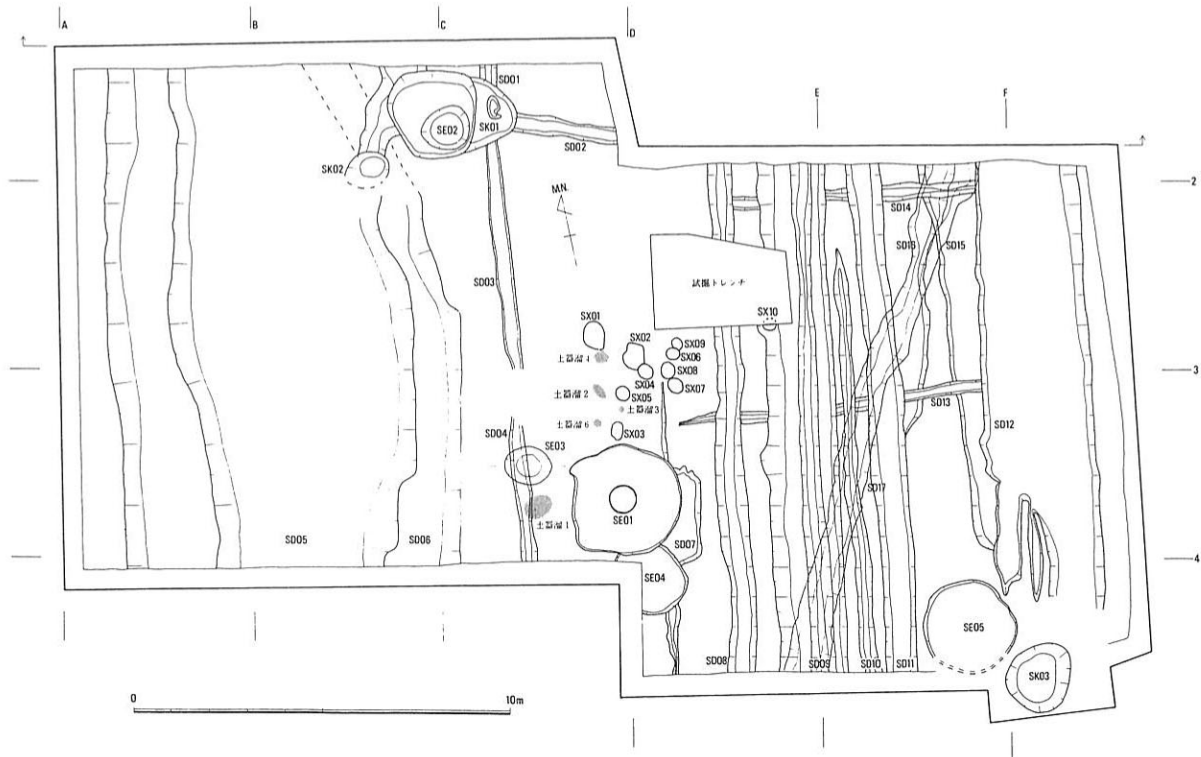
辻村純代は未成人埋葬における畿内的特徴として、胎乳児が土器棺に埋葬されるのを除くと、未成人と成人の葬法は基本的に区別がない点、成人としては共通する副葬品を有し、赤色顔料の塗布など特

なる。弥生時代中期後葉は斜位の占める割合が圧倒的に多く、この傾向は弥生時代後期になっても引き続きみられる。ところが、古墳時代前期には横位が飛び抜けて増加し最も多くなる。

【副葬品】 府下の土器棺から副葬品が出土するのは、弥生時代中期後葉段階に限定される。高槻市安満遺跡では棺外に先端を歯潰しした磨製石剣1点を副葬した土器棺が検出された。八



久宝寺遺跡方形周溝墓（降接型）（西村 1989）



萱振遺跡（隔離型）（大野編 1983）

図305 古墳時代前期における土器棺の二者

別な扱いを受けた幼児がいること。また、そうした特別の埋葬がおこなわれた成人骨は男性であるという点。前者は縄文社会的特徴であり、後者は九州社会と共通する一面を示していると考え（辻村 1993）。

瓜生堂遺跡 2 号方形周溝墓 1 号・4 号土器棺は他地域産の土器を棺身にしており、被葬者が他地域からの婚入者の「子供」であると考えられた。また木棺は成人、土坑墓が成人式前、土器棺が乳児・胎児という差を示していることが想定された（田代 1981, 都出 1986）。では、方形周溝墓と関係なく単独で埋葬された土器棺はどのように理解すればよいのだろうか。

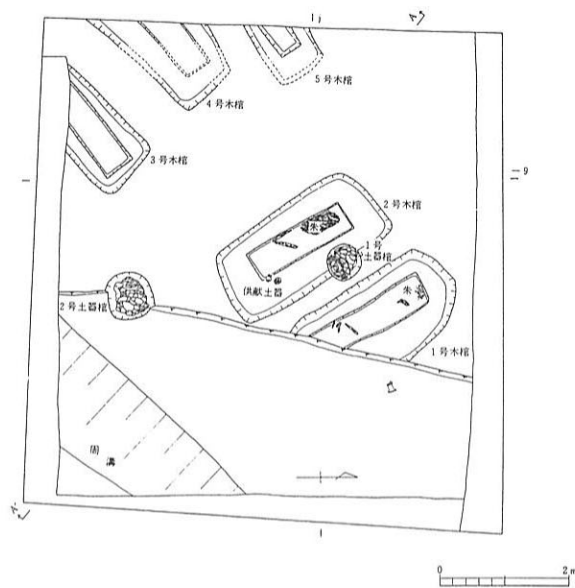
この問題を考えるうえで、傾聴に値する説がある。芋本隆裕は西之辻遺跡・鬼虎川遺跡の例では、壺を棺身とする場合には胎児が、甕を棺身とする場合には乳児が葬られたことを指摘し、棺に用いられる土器の器種の違いには遺体のサイズと関係すると考えた。また、これらの土器棺がいずれも旧河道付近から発見されていることから、早産や死産あるいは生後間もなく死亡した乳児などは、集落構成員の墓域には埋葬せず意識的に川岸に葬られた可能性があるとした（芋本 1992）。今回検討した結果からも、弥生時代中期後葉段階では棺身に壺でなく甕を使用するもの、壺のみの単棺であるものが多いことを指摘したが、弥生時代中期に甕が多く、弥生時代後期になると壺が多くなる傾向は瀬戸内地方と共通している。棺身の器種の差は、芋本のいうように年齢差・遺体のサイズと深く関係しているの可能性は高い。しかし、弥生時代後期段階では、甕の棺身への採用が減少することに伴い、壺が棺身の主体となる。これは年齢差による棺の使い分けの原理が衰退し、壺の口頸部を打ち欠くことに意味が付加されるのではないかと考える。つまり、胎児も乳幼児も壺を棺身としたものへ埋葬されるようになるのではないか。

芋本のこの説は、基本的に弥生時代中期の方形周溝墓は家族墓であるという説に立脚してのものであるが、ここで重要なのは、土器棺単独で存在する事例に対して、はじめて解釈を試みたことである。しかしながら、方形周溝墓の方台部に埋設された土器棺と単独の土器棺墓の意味については説明されていない。では方形周溝墓に埋設された遺体は、はたして本当に家族という関係にあったのだろうか。この点については異論もある。

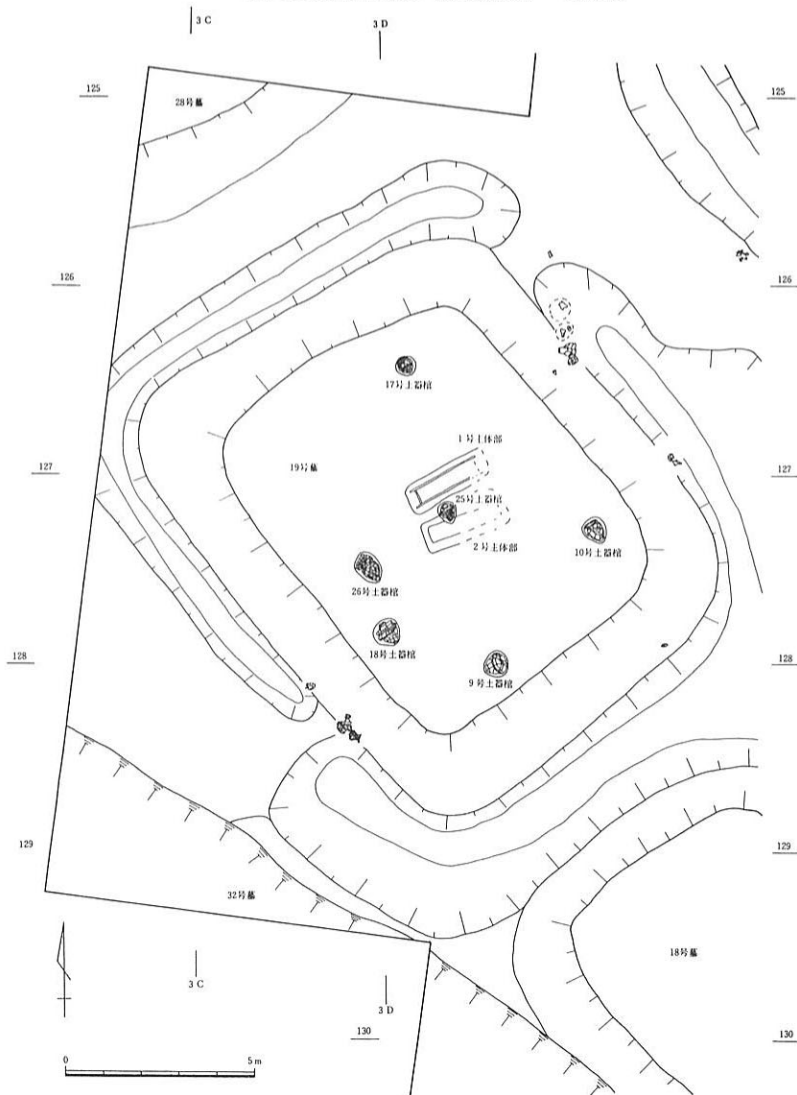
大村 直は南関東地方における、土器棺を分析し、胎児、乳幼児埋葬が埋葬方法、埋葬空間において、小児以降とは年齢的に分離される可能性と、土器棺埋葬がかならずしも一般的ではなかった可能性を想定した。また、少数の土器棺を根拠として、方形周溝墓が「家族墓」であることを主張することに対して疑問を投げかけて、方形周溝墓も厳密に述べれば、葬制における集団原理にしかすぎない考える（大村 1991）。大村が指摘した土器棺の方形周溝墓方台部への埋葬の少なさは、畿内地方でも数遺跡で限定的にしかみられないという点で妥当である。大阪府下の土器棺の検討結果からは、方形周溝墓が家族墓であるとは断定できず、葬制における集団原理と理解しておくことが適切ではないか。

いずれにせよ、土器棺の数の少なさは当時の胎児・早世した乳幼児全てが土器棺に葬られたのではないことを示している。これは、死亡原因、死亡した環境、日時などが、特殊な場合や特別意味が付加された場合にのみ土器棺に埋葬されたと考えるのが妥当ではなかろうか。

以上のような憶測に基づいて、各時期の土器棺葬の変化を意味を考えてみよう。弥生時代中期後葉には方形周溝墓に伴う土器棺と、単独のものの二者があるが、方形周溝墓を家族墓でないとすると前者は隣接型土器棺、後者は隔離型土器棺として類型化できよう。大阪府下では、隣接型・隔離型は弥生時代前期の段階から存在しており（角南 1999a）、土器棺の埋葬位置は階層性と考えたよりも、葬制の系譜の差ととらえる方が説得力がある。隣接型土器棺の中で、注目すべきは、大阪市城山遺跡 19 号方形周溝



亀井遺跡 ST0101 (広瀬ほか 1986)



城山遺跡 19号方形周溝墓 (杉本・岩瀬 1986)

図306 木棺を切って埋葬された土器棺

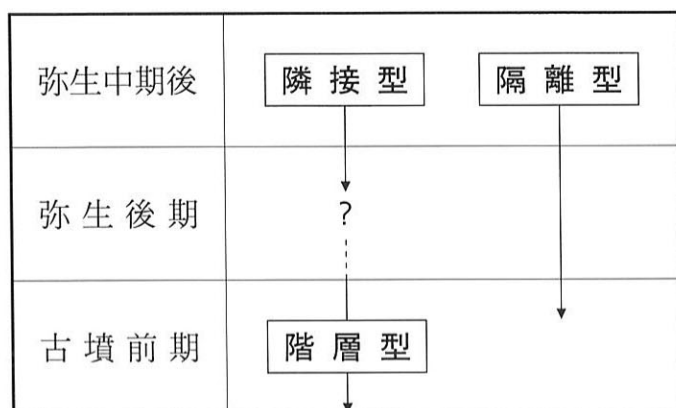


図307 土器棺類型の消長概念モデル

墓25号土器棺、八尾市成法寺遺跡2号土器棺、八尾市亀井遺跡ST0101 1号土器棺などのように、「大人」埋葬施設である木棺の墓坑を切って土器棺が埋設されたものがあることだ(図296)。

北部九州地方でも甕棺を切って甕棺や土器棺が埋設される場合があるが、福岡県甘木市栗山遺跡C群墓域を分析した溝口孝司は、古い被葬者の死亡時の、それに挿入される新しい墓葬の被葬者の年齢推定から、後者と前者

の間に生前に直接的に取り結ばれた社会関係が存在しなかった可能性があること、後者の葬送の執行者が、古い墓葬の被葬者の生前の事跡を直接には知らなかった場合があることを推定した。このことから、特定祖霊に関する『記憶』がある種の『資源』として、葬送行為において動員されたであろうとの解釈を導き出した(溝口 1995)。この解釈を畿内の木棺と土器棺の関係に援用するならば、両者が血縁関係であると断定することは危険であり、血縁関係以外を想定することも可能である。つまり、弥生時代中期に限定するならば、北部九州地方の甕棺二列埋葬が、甕棺墓という一つの墓制中に「大人」用甕棺、「子供」用の土器棺という別の葬制が隣接しているとも理解できる。近畿地方では方形周溝墓という一墓制中に、「大人」用の木棺、「子供」用の土器棺という別の葬制が隣接しているといえよう。また畿内地方ではほとんど、平地に埋設された木棺墓や土坑墓に隣接して土器棺墓は立地しない。土器棺墓は単独もしくは土器棺墓のみ立地する。

これまでの方形周溝墓は、周溝やマウンドに留意した解釈が先行した感が否めない。翻って「大人」と「子供」の葬制の違いに注目してみると、畿内地方の方形周溝墓に伴う土器棺のポジションは、北部九州地方の甕棺墓に伴う転用土器棺の在り方と類似していることがわかる⁽⁴⁾。これとは別に、畿内地方では「大人」の墓に隣接しないで、土器棺墓のみで「子供」を葬る場合もある。このような、畿内地方で二つの「大人」と「子供」の埋葬位置が異なる墓制は、先にも述べたように弥生時代前期からすでに存在しているようである。その差異の背景としては、墓に埋葬された被葬者の帰属する集団の系譜が異なっていたものと考えられる。

弥生時代後期になると、副葬品の在り方等からも、従来から指摘されるように方形周溝墓の意味自体が変容し、階層的な様相を伴う墓制となる。この段階でも大阪府下では方形周溝墓の方台部に土器棺が埋設されることが僅かながらみられる。この土器棺が果たして、階層的秩序に則ったものであるかどうかは不明である。しかし、古墳時代前期の段階に古墳墳丘に埋設される土器棺は確実に弥生時代中期後葉のものとは質的に変化しており、土器棺葬の意味が変容したことを物語っている。これらの議論を踏まえて、最後に畿内地方の埋葬された「子供」についてのモデルを作成し説明してみよう(図297)。隔離型土器棺は、「子供」の墓たる土器棺が「大人」の墓たる木棺墓・土坑墓と明確に区別されて埋葬されており、この類型は弥生時代後期、古墳時代前期にも存続している。

隣接型土器棺は、弥生時代後期に著しく減少し、古墳時代前期にも若干存在する。この間に土器棺の意味は大きく変容し、古墳時代前期のものは階層型土器棺とでも呼ぶべき階層原理に沿った「子供」の墓として埋設されたと考えられる。

第5項 おわりに

溝咋遺跡の土器棺墓を契機に、大阪府下の弥生時代中期後葉～古墳時代前期の土器棺を集成し、検討を試みた。この結果によれば、溝咋遺跡の土器棺墓はいずれも土器棺墓のみ単独に立地しており、隔離型の土器棺であるといえよう。土器棺墓1の棺身に使用された壺は、吉備地方もしくはその周辺からの搬入品であるが、この土器の故地では弥生時代後期段階では方形周溝墓は主流の墓制ではない。もしも、この棺に埋葬された「子供」が、この土器の故地からの移住者かその子供とするならば、この時期に吉備地方では隔離型の土器棺が多いことから、故地の墓制が反映されたとは考えられないだろうか。いずれにせよ、溝咋遺跡の土器棺墓資料は、弥生時代中期から後期への過渡期の資料であり、土器棺葬の変容を考えていくうえで貴重な資料であることに変わりはない。(文章中敬称略)

謝 辞

本稿作成にあたって、水野正好先生、酒井龍一先生の御指導を賜った。また、溝咋遺跡の調査担当者である合田幸美氏には、遺構・遺物に関して御教示を頂き、本稿執筆の機会を与えていただいた。そして、以下の方々にも御教示・御協力を得た。記して感謝します。忽那敬三、松田順一郎、松田朝由、三好孝一（順不同・敬称略）

註

- (1) 本稿では溝咋遺跡の土器棺墓の時期を、弥生時代後期初頭と捉えている。
 (2) 土器棺・土器棺墓の諸属性については、前稿に基本的に従っている（角南 1999 a、1999 b、1999 c）。本稿で問題とする、その立地・棺の器種組成・埋葬状態についてあげておく。

《立地》

A類－方形周溝墓・円形周溝墓と立地上関係するもの

- A 1－方（円）形周溝墓の主体部として埋置されたもの
- A 2－方（円）形周溝墓の溝内・溝底に埋置されたもの
- A 3－方（円）形周溝墓に隣接して埋置されたもの

B類－土壇墓と立地上関係するもの

C類－墳丘墓と立地上関係するもの

- C 1－墳丘墓の主体部として埋置されたもの
- C 2－墳丘墓の盛土・墓壇内に埋置されたもの

D類－古墳と立地上関係するもの

- D 1－古墳の主体部として埋置されたもの
- D 2－古墳の墳丘隅に埋置されたもの
- D 3－古墳の周溝内に埋置されたもの
- D 4－古墳に隣接して埋置されたもの

E類－単一墓制（他の墓制と立地上関係しないもの）

- E 1－単独
- E 2－複数

F類－住居跡の覆土中・床下・周辺に埋置されたもの

G類－支石墓と立地上関係するもの

H類－箱式石棺墓と立地上関係するもの

《器種組成》

I 類－棺身に壺を使用するもの

- I 1－棺蓋に壺を使用するもの
- I 2－棺蓋に甕を使用するもの
- I 3－棺蓋に高杯を使用するもの

Ⅱ類－棺身に甕を使用するもの

- Ⅱ 1－棺蓋に壺を使用するもの
- Ⅱ 2－棺蓋に甕を使用するもの
- Ⅱ 3－棺蓋に高杯を使用するもの

- | | |
|-------------------------------------|----------------------------------|
| I 4 - 棺蓋に鉢を使用するもの（台付鉢も含む） | II 4 - 棺蓋に鉢を使用するもの（台付鉢も含む） |
| I 5 - 棺蓋に石を使用するもの（板石・河原石等） | II 5 - 棺蓋に石を使用するもの（板石・河原石等） |
| I 6 - 棺蓋が無いもの（＝単棺） | II 6 - 棺蓋が無いもの（＝単棺） |
| I 7 - 棺蓋が不明であるもの
（削平・攪乱などを受けている） | II 7 - 棺蓋が不明であるもの（削平・攪乱などを受けている） |
| I 8 - その他 | II 8 - その他 |

Ⅲ類一土器蓋土坑墓

《埋葬状態》

ほぼ直立なものを正位、墓坑に対して横に置かれているものを横位、棺が天地逆に置かれるものを逆位、それ以外を斜位とする。

（3） 前回の埋葬遺体の集成（角南 1999b）では、亀井遺跡からの2例（高島ほか 1983、杉本・岩瀬 1986）を見落としていたことに気付いたので、ここで補っておく。

（4） 方形周溝墓の場合は、墓域を区画した痕跡としての明瞭な周溝が、遺構として検出される。しかし、甕棺墓の場合は墓域を区画したであろうものが考古学的に遺存していない。このため同一の場に「子供」を葬った転用土器棺が存在していても、甕棺と転用土器棺を同一の墓制として捉えることができない。そのため、現状では「甕棺墓」、「土器棺墓」という別の墓制として表現している。

引用・参考文献

- 芋本隆裕 1992 「谷内で検出された壺棺墓・甕棺墓について」『西之辻遺跡第23次発掘調査報告』東大阪市教育委員会・（財）東大阪市文化財協会
- 大村 直 1991 「方形周溝墓における未成人中心埋葬について」『史館』23
- 岸本一宏 1987 「畿内弥生社会構造に関する一考察」『文化史論叢』上 創元社
- 佐原 真 1968 「畿内地方」『弥生式土器集成本編』2 東京堂出版
- 清水真一 1998 「西日本の土器棺」『弥生人のタイムカプセル』福岡市博物館
- 角南聡一郎 1997 「西日本における畿内系甕製作技術の展開」『奈良大学大学院研究年報』2 奈良大学大学院
- 角南聡一郎・山内基樹 1998 「兵庫県下の土器棺・土器棺墓」『播磨大中遺跡』播磨町教育委員会・奈良大学文学部考古学研究室
- 角南聡一郎 1999a 「初期区画墓と土器棺墓」『古川遺跡』門真市教育委員会
- 角南聡一郎 1999b 「西日本の土器棺墓と埋葬遺体」『奈良大学大学院研究年報』4 奈良大学大学院
- 角南聡一郎 1999c 「土器棺の副葬品」『文化財学報』17 奈良大学文学部文化財学科
- 曾我恭子 1972 「土器」『瓜生堂遺跡資料編』瓜生堂遺跡調査会
- 田代克己 1981 「まとめ」『瓜生堂遺跡』Ⅲ 瓜生堂遺跡調査会
- 田中清美 1986 「近畿弥生社会の墳墓」『早良王とその時代』福岡市立歴史資料館
- 田中清美 1988 「弥生時代前・中期における穿孔・打ち欠きのみられる土器について」『考古学論集』2 考古学を学ぶ会
- 田中良之 1998 「出自表示論批判」『日本考古学』5 日本考古学協会
- 辻村純代 1993 「古代日本における子供の帰属」『考古論集』潮見浩先生退官記念事業会
- 都出比呂志 1970 「農業共同体と首長権 階級社会の日本の特質」『講座 日本歴史』1 東京大学出版会
- 都出比呂志 1986 「墳墓」『岩波講座 日本考古学』4 岩波書店
- 寺沢 薫・森井貞雄 1989 「1 河内地域」『弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅰ』木耳社
- 春成秀爾 1985 「弥生時代畿内の親族構成」『国立歴史民俗博物館研究報告』5 国立歴史民俗博物館
- 藤田 等 1988 「北部九州における弥生時代未成人埋葬について」『日本民族・文化の生成』1 六興出版
- 溝口孝司 1995 「福岡県甘木市栗山遺跡群墓域の研究」『日本考古学』2 日本考古学協会
- 三好孝一 1998 「河内地域の中期末から後期初頭の土器」『みずほ』26 大和弥生文化の会
- 三好孝一 1999 「河内湖周辺における弥生時代中・後期の集落」『第45回 埋蔵文化財研究集会』埋蔵文化財研究会

【土器棺関係文献】

- 赤井毅彦 1998 『東山遺跡発掘調査報告書』河南町教育委員会：浅岡俊夫編1998 『下田遺跡』下田遺跡調査団・六甲山麓遺跡調査会：泉本知秀 1980 『高屋城跡発掘調査概要』Ⅳ大阪府教育委員会：井上直樹 1990 『東奈良遺跡（88-6）H・N H-4-M・N地区』『平成元年度発掘調査概報』茨木市教育委員会：井上直樹 1988 『東奈良

遺跡(87-2) H・N H-5-1・M地区』『昭和62年度発掘調査概報』I 茨木市教育委員会：今村道雄ほか
 1981『瓜生堂遺跡』Ⅲ 瓜生堂遺跡調査会：芋本隆裕編 1992『西之辻遺跡第23次発掘調査報告』東大阪市教育委員会・(財)東大阪市文化財協会：岩崎二郎ほか 1980『瓜生堂』(財)大阪文化財センター：岩崎二郎・岩瀬 透 1981『川北遺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会：大船孝弘 1980『嶋上郡衙他関連遺跡発掘調査概要』4 高槻市教育委員会：大船孝弘 1985『嶋上郡衙他関連遺跡発掘調査概要』9 高槻市教育委員会：大野 薫編 1983『萱振遺跡発掘調査概要』I 大阪府教育委員会：岡田清一 1997「Ⅲ 神宮寺遺跡」『八尾市文化財調査研究会報告』57 (財)八尾市文化財調査研究会：岡本敏行ほか 1985『美園』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター：近江俊秀編
 1989『亀井遺跡』(財)八尾市文化財調査研究会：尾上 実 1981『東阪田遺跡——1979年度第4区の調査——』大阪府教育委員会：尾上 実・岡本敏行 1986『大里遺跡発掘調査概要』Ⅱ 大阪府教育委員会：奥 和之・山上 弘 1986『亀井北(その1)』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター：小野久隆ほか 1986『亀井北(その2)』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター：勝田邦夫ほか 1984「1 瓜生堂遺跡」『(財)東大阪市文化財協会年報1983年度』(財)東大阪市文化財協会：川端博明 1998『耳原遺跡・五日市遺跡』名神高速道路内遺跡調査会：北野 重 1993『本郷遺跡 1991・1992年度』柏原市教育委員会：北野俊明編 1986『鈴の宮』V 堺市教育委員会：桑野一幸 1987『安堂遺跡1986年度』柏原市教育委員会：小林義孝 1983『甲田南遺跡発掘調査概要』Ⅲ 大阪府教育委員会：小林義孝 1985『甲田南遺跡発掘調査概要』V 大阪府教育委員会：(財)大阪市文化財協会編 1985「吉内邸新築工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG83-63)略報」『昭和58年度大阪市埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』大阪市教育委員会・(財)大阪市文化財協会：阪田育功 1984『萱振遺跡発掘調査概要』Ⅱ 大阪府教育委員会：白石耕治編 1991『池田下遺跡』和泉丘陵内遺跡調査会：杉本二郎・岩瀬 透ほか 1986『城山(その1)』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター：曾我恭子ほか 1972『瓜生堂遺跡 資料編』瓜生堂遺跡調査会：曾我恭子ほか 1973『瓜生堂遺跡』Ⅱ 瓜生堂遺跡調査会：曾我恭子ほか 1994『西ノ辻遺跡第27次・鬼虎川遺跡第32次発掘調査報告書』(財)東大阪市文化財協会：大楽康宏ほか 1986『亀井北(その3)』(財)大阪文化財センター：高島 徹ほか 1980『亀井・城山』(財)大阪文化財センター：高島 徹ほか 1983『亀井』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター：高野 学ほか 1989「喜志遺跡」『古市遺跡群』X 羽曳野市教育委員会：高野 学・小嶋 亮 1992「1 駒ヶ谷遺跡の調査」『羽曳野市駒ヶ谷地区埋蔵文化財試掘調査報告書』羽曳野市教育委員会：高萩千秋 1991「I 久宝寺遺跡(第5次調査)」『八尾市埋蔵文化財調査会報告』32 (財)八尾市文化財調査研究会：高萩千秋 1994「X IV 東郷遺跡(第43次調査)」『八尾市文化財調査研究会報告』42 (財)八尾市文化財調査研究会：田代克己 1959「茨木市上穂積出土の弥生式壺棺」『古代学研究』21・22 古代学研究会：田代克己ほか 1971『瓜生堂遺跡』中央南幹線内西岩田瓜生堂遺跡調査会：田中清美ほか 1991『池田寺遺跡IV』大阪府教育委員会・(財)大阪府埋蔵文化財協会：辻本 武 1987『雁屋遺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会：坪田真一 1992「Ⅲ 竹淵遺跡」『八尾市文化財調査研究会報告』55 (財)八尾市文化財調査研究会：坪田真一 1993「Ⅱ 小阪合遺跡(第19次調査)」『八尾市文化財調査研究会報告』41 (財)八尾市文化財調査研究会：中辻 巨編 1986『喜志西遺跡発掘調査概要』富田林市教育委員会：中西克宏 1986『久宝寺遺跡発掘調査報告』(財)東大阪市文化財協会：西川寿勝 1997『池上曾根遺跡発掘調査概要——池上下宮線建設に伴う調査I——』大阪府教育委員会：西田敏秀ほか 1980『星ヶ丘西遺跡』枚方市文化財年報18 (財)枚方市文化財研究会：西村公助 1989「6 久宝寺遺跡(第3次調査)」『八尾市文化財調査研究会報告』25 (財)八尾市文化財調査研究会：西村健司 1995「5 田口山遺跡(第18次調査)」『枚方市文化財年報14(1992年度分)』(財)枚方市文化財研究調査会：橋本久和・川村雪絵 1998「嶋上郡衙跡の調査(1)」『高槻市文化財年報 平成8年度』高槻市教育委員会：浜野俊一・中東正之 1991「東奈良(90-1) HN G-7-C・G・K地区」『茨木市埋蔵文化財発掘調査概要平成2年度』茨木市教育委員会：広瀬和雄ほか 1986『亀井(その2)』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター：藤井直正ほか 1972『勝部遺跡』豊中市教育委員会：藤沢真依 1990『史跡池上曾根遺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会：松宮昌樹 1997「Ⅱ 瓜生堂遺跡第42次発掘調査概報」『東大阪市埋蔵文化財発掘調査概要——1995年度調査(1)——』(財)東大阪市文化財協会：三宅正浩 1990『土師の里遺跡 盾塚・珠金塚・鞍塚古墳他発掘調査概要』I 大阪府教育委員会：三好孝一ほか 1995『巨摩・若江北遺跡発掘調査報告』(財)大阪文化財センター：森井貞雄 1989『1988年度 亀井遺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会：森井啓次 1997「招提中町遺跡(第33次調査)」『枚方市文化財年報』18 (財)枚方市文化財研究会：森 茂編 1993『万町北遺跡』I 和泉市丘陵内遺跡調査会：森田克行 1988「59 芝生遺跡」『昭和59・60年度 高槻市文化財年報』高槻市教育委員会：山上 弘編 1997『総持寺遺跡発掘調査概要』Ⅱ 大阪府教育委員会：山上 弘 1989『成法寺遺跡発掘調査概要』Ⅳ 大阪府教育委員会：米田敏幸 1985「2 恩智遺跡の調査」『八尾市内遺跡昭和59年度発掘調査報告書』八尾市教育委員会：米田敏幸 1987「中田遺跡発掘調査概要」『八尾市内遺跡昭和61年度発掘調査報告書』Ⅱ 八尾市教育委員会